



俳諧三部

單

伊地知文庫
文庫20
353



誹諧秘記一書百韻四十四哥價去嫌夢相其外秘らふ事少といふは
 袖珍抄一書發句十八の切字其外千尔葉の傳來と考ゆらるる
 本式古式一卷誹人席に望む心得るへ事秘記

誹諧之部書全

文榮堂
 翰林堂
 文觀堂

浪卷書林

伊地知氏書冊

誹諧之秘記

誹諧傳と云事世より聞く多し予能素
 一道理如く氣力を盡と神日能因縁法舞を
 師と多家人又人あり師よりと師と也来
 誹諧成就結何日有只是合らると云事
 有りハ向者中云結ん出成就結本意此
 按衣專要外たり濟傘必有全堂と云亦
 見あつた寸前と先宗道の云掃くあり
 若席結不真漢中貞徳す川多師傘

上
ごころはふたふたのごころす道に叶ふ乃強如く
かた一むねに簡奪要と書つる高情ゆか
とせぬあそ本意すくなくしふふ我々
孫小路殿乃一巻法也なり堂上は面々
此てふをい乃外なり詠諧は日本に
あひかりに受法知すし多宗道は
善ふ人後ししせりも疎密形別

とくを記

詠諧之秘記

不式表

無ハ不入神祇神教ハ後句川雪
花同くきたる名不無意水山

そみ表十句ハ知家人多し裏に詮
五沙法なり

ウラハ古法二句也此二句ハ意法入
るし今首尾之吟とて表六句裏六句
なり自然古法表裏乃教みかむい
る事乃自然なり

二つ物し事



天地人ここのちや衆且る天意むし〜
代理たり衆之人心をかり此心ゆる上ハ
いふ徳も自由あり〜衆具みかきりこの物と
了る之救火能取則陽を照る行禱あり

歌仙二十六ノ教ハ

アナニエヤニエヤウニレヲトコニアヒヌ 十八
アナニエヤニエヤウニレヲトメニアヒヌ 十八

百韻といふ事

百句トあもる百韻百吟をいふべきをいふ教

トハド不思儀下ノ極なり〜知人知〜
久事足たり此教詩と刻々数々雪月
花に用所明のなり

表八句裏十句をり裏十六句ト
教ラ定むづかり律詩終句安教人

仍テ表ノ類

起請轉合 四句メと五句メヨリ

起請轉合 月ノ在轉ノ場也

裏ノ月花は在衆とを純に轉乃不極
ある也再熟耳心不が仍韻ノ字海をり

よりの半 五別条入十類ハ半類ト云ふ

禱禱ハ総括ノ事 以受

誹ハ俳也 カヘシハイハヒニ 別傳委 仍古今もいづれ乃

字用てもくろくす 宗祇文庫書ノ委細

あり清補の不審と書ふは是ハ不審也

祇六義ハ連歌ノ類ノ類道六義也

△風 引へいこよそくよあるをり 実家ハいこよそくねを具品物ト也合てありをり

△賦 引 本意ノ鋪入故ノ賦をいふ云々之類ハ重なり

△比 引 譬喩也

△興 引 本意ノ起興ト云アリ然る事ハ亦遠之

△雅 引 本意ノ雅言ト云アリ然る事ハ亦遠之

△頌 引 本意ノ頌言ト云アリ然る事ハ亦遠之

十七字ノてルをハハ常也

十八十九ノハ後句ハあへ一字二字

上
入て字句や心切にたり

夢想之事

幾句をくば表六句一に我夢想ノ句經句を
ハ表七句加ふ一に百韻要の歌仙一花賀
魚行ハ雅經キ一之寫表九句も日一
一白し花冠の事ハ外句と夢想小字を
者ノ舍ニ尸さるる事未練之に身より下意練を
千句後雅小香紙燈ノ友白しノ花トヤも
夢想ノ意也

賦物之事

賦ノ字經
夢ノ字經

△上賦ハ 山路ヲ何路ト取也

△下賦ハ 山路ヲ何ト取也

△一字省略ハ 香ハ故也

△二字反音ハ 花ハ繩也

△三字中略ハ あやちハ雨也

△四字上下略ハ うづむ寸杖也 此のころ遠くははれず若
くは取らるる利ありは

△五字中三字略ハ 杜あハ肩也

△三字上下略ハ あやちハ矢也

△上賦下賦ノ外詠之をてもかゆいなりかゆい

とよハ重秘を知りぬ人乃し変也

加字に才助字也此一も切字の類也。一白
 此極梅が如くは切字と極て用ひてつらくは極す
 とつたおみさうに初心の為なり。こつたおみさうに
 らぬ申ハ極端れ此類はあつた此境極は又事なり
 一引おしぬハ 教向ハ一とバ不角もさしとさしとを
 角おしぬしをり第一に角もさしと極
 ちのこらよとせぬとぬる一

一と極ぬハ

固のまうらうとら極ぬは
 極の極くハ一と極ぬる由

允太ノ向めてフルツクと字ヲ入てんふのうとさる
 とおしぬとぬるもさしと極ぬるもさしと極ぬる

がみ申す也つたうつたうてがみ傳受をり重極ハ
 何れかさ字をとも隨分風情も由家といふをさ
 ゆ強とよとぬるなりね乃にさうらあハばさぬと申
 とみさうり此内ハ何れかさうなるなり可考一とさ
 是くて論者ハのいて通射そのなり和舟は道也
 論強んとすれば我大事は不覚を益といひらじ
 人乃宝小する事深すく見者ハ此類ハなり
 一て尔を案るぬに照ハ石禁紙監編トスル也又楚
 乃り危也このハ鴨之柱といふ海守ぬハぬ也
 一第三ノ類字留メハ用科の骨物とてぬ文字乃

そのよてぬん貞室融結月々多々行つて奇異ノ
考ありや是よて格有ん

一第ニ一字顔字ハ哉小のどうだ一字顔とるべし

一をよしハよまるとふして下よをくそまへ候たり

二おそくくまるとふして下よをくそまへ候たり
三月とするたり

一又四知不ぬ事也

律りやせぬつりやせぬ花結雪

ほりハせぬせじの雪くぬりもく

一三候知物と三つ分つるもそ子物なり

霜を今朝顔結本は布園りて

一三字知

あいてとよ何れかおね梅乃花

梅志清魚の介汚様結白いそり結せつる色

多くハバいんりやば雪たど思こ物ハ等しと

いよ意なり雪結白きに射る物なれと云

一則去現左未未結しハ

いよをよし候結知字之るふをよしハ

去不物之たよをよしハを去不物

上

米素ハあるべし〜あるべし〜あり〜

な〜〜霧〜ぬ〜人〜
本〜子格也切字よりなりこ

一 別りやハ成哉よそふ通し

一 神祇神教悪ノ大智と尸事あり運子何と

ホノ外ニ秘し尸事也尸事ハ神中此の道ヲ考ふこ

乃重秘を志すハ府治ニ傳へ尸事ハ外代言也

多〜ハ江忘み結むる神祇と神祇ノ向小二向

去り昇つニ向去と是ハ掛穿米練之難也同と

なり神祇と神祇トニ向去之悪の情の神祇格

別りや

一 賦物ノ事ハ何れに流どもあり仙用と〜

歎ハニイハリツクハ何れもや何れもは向より

盟編〜〜〜〜新講を何れに賦ノ字ハ何れ

と〜〜〜〜〜〜書〜〜〜〜〜〜後人ハ〜〜〜〜

賦 日下武

賦 點ナレ 武家秘本
此一格ナレ賦不

篇を書ふ日下と何れありしてま〜と〜其異
認ノ事成る〜賦物ハ何れに懐帝の器何れ〜
を〜〜〜〜〜〜細〜〜〜〜〜〜賦〜〜〜

くふをそかそそふ如想し一上古徳無し多し
ふ事あり其ふすのくあふゆ之本式は面ハ賦也
十句ハ在ハ振ル取て是ハ後人の取たり最也
表十句了し一ハ四合左振ル取のりハ表細乃
事ハはくくす只一通すそ人取も十句ハ在ハ後
取りも一毎ハ如想し一ハ振取取り事とハ尾
取ありゆ一ハ賦乃事要の大事ハ祈禱ハ方七
口受

夢想之事夢字ノ書振取字ノ賦乃字
を不筆長字ハ

夢

廿四日夕

廿四夕との刻字

天祚の祈日ハ表表と取也廿四乃夕
と書と不認其不存其事人をゆより信しむ
各々連奇飾乃尸とてカ受用して尸とて系者
教多たり長ノ字何のふらし一夢想は知く
去歳表ハ祈禱賀儀のふらし一あるはしき
かりおくくまふ系麻ハ聖像はのけ焼香
不徒執筆多計と取し一甲正 夢想ハ事一也
すはば宗匠身ともとる一ハ海て一家と想代と

書てすもあり又弟三に惣代とて一紙を附
家もありいづれも不若ト云々時好附はあ
るといふ所きりふたりかおといふ後向ふしまは
子類い

玉柳いびい一多しやなとていふをいふなり
の好きとていひけ家友なり新室具外賀ん
流譜の心か無し
ふ向は仕やうに別条九執等三人より六人まで
宗通は教ほぐ一紙宗通十人、執等十人とし
まもねくと宗通も三人より六人とて宗通

助言宗通向宗通とて三人是能有ん一初明六
紙をてしは登七つ紙は後在一紙とてかくは森と
追か案紙無し

一うしざくあけ中二尺五寸高、一尺四寸五分
南足當日紙教向あけ短冊十枚也折釘打
短冊寸法 中一尺九分 又一寸八分より 十百額
一ハ百額出本は後をいざく一枚うけと紙如也
一ハ文字もやと知らんと安し教向紙附ハつとて
也やちり或やちり不定持也まといふいふなり
ありあり

一哉 多々くさるる

園ナル哉此人の介る一
貧ナルかは人の介る一

本准て花の柳の心物二つをてりしゆり
定より二考

一才二小のさぬ 奇異の事かやふり 傳へると除字
てふをほしてはめくろく 奇異 神をりしゆり
きうちてのとあつた けいあてなりぬ 除字のてふ
たり 各准てかやうに 事かやふり 柳の心物
こ園をたりぬとて 通とて 論とて 論とて 論とて

一若菜十二種 多くあつた人あり 仍記す
割 苜 芹 蕨 薺 菜 蓬 氷 蓼 水 雲

芝 松 玉 此中若菜のついで 説書 百川院の松
を奉 僻事トア 又外記 師をト云 又提 用之 一系
家説あり

一 香季之中小

箱島 貞名 香うふいすれやうにそとくま
に用事 経るも 不吟 味あり 雄畧記よりくろ 香
局之 雜ん 深成し ともやうの 家事も 家も 中
人のこころあはれ ともやう 論とて 論とて

一 馬酔本と書るるあやまの夏之あやま 花候とよふ
るも 香あり 俗云 尸世ホの 香あり 香あり 香あり

一 加冠乃賦と云半あり多し人ば癖とて付小半
冠をして癖と加へ奇異乃例る事

一 昭ハ心何より付公附らるる人らもいふらあり
箇指之半ハ未細よするに不及流滞成就なまは
書も益ねし流滞とたば自れと流滞なり

賀ノ仕ヤリ受

一 第三ノケるる事向と後

櫻花梅柳 松竹 花を待窓く刻すま
すまこの屋此おいろく一花のあり異別版
乃流滞公之未練成就ノ味といふ細よ及し内

流義公後向にけり流もみせ代た
あきつる毎向無く多くある事なり

一 剣張乃ら一順をば向事流滞いふもすく
とすむし多くうら流滞蓋ね不なり骨流お
一 流滞も無さ板行し多もくらく也流滞れ
拍子流へもるおなり

此格あり

一 一字とねハなん せん せん せん
一二字とねしハお向押一字流うけそめり也

一 二字くるとい

多し人ば玉藻さくといふ句
おし付花は米播と付ル語いなり

一 四字不問ハ

松と石と骨茶向と風と波付と

一 濁定の死ハ

のまゑむてしぬ家なり

句切まふとふ事有季吟詠指の句

○まめをねハ毎ねをうり。紅葉して

句切まふと後人其名目之句より切て示を

ふりの也

一 重複又地又ハ

二度ある事又新なるハ地又なり

一 ずとてふとい

セリ結ぬり字にてはよてあまさを

ふたりぬい格之

一 皮肉骨と

こらふけをる 骨骨 手切らる

に一向くは皮肉骨調中物之骨ラせん

と云ふ肉ははんとおまハ此道は又好いなり

は是乃詠詠もそのほい未練人又教ても

一 下の向ハ二五三四五二四三といふ事

いりあも是之縁を

二五三四とは

おまに時節をゆくさくは

侍る君み君なるあのはさき

五二四こととは

橋翻るほくきんるく

乃振人の行果もあは

二五五二別糸ぬー三四んく四之と為ーか

不存人知も子向をまは

歌の篇序題曲流當時遊潜口くある事其

作者志す此の情ん味も事き一たり未練は

云はゆき事

一三十躰 十種の内より出る事之後向はなるいふ

もあへし身はとらき向ハ三十種の内
もよ加もつハ物

△幽玄躰 △行雲 △廻雪 △長高 △高山 △遠白 △澄海

△有念 △物哀 △不明 △理世 △極民 △至極 △麗神 △存世

△花麗 △松躰 △竹躰 △花躰 △秀逸躰 △抜群 △写古

△面白 △一真 △景曲 △濃躰 △見格 △一節 △拉鬼 △強力

附句
六休 クリツケ
ヒットリ
クラベ
ヨソヘ

大發句題在之時はうへうを繋ト力なり

發句ハ多ク拙の極也と云ふと角主人云を

上

ふそいのみも向ふ加やう小佐配一能主人云々
きは給ふの辨ぬまゆや
こゝに私家純は景感道と云書あり

十四

とや紙左判

詠諧之秘記

